



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	ハンガリーの小学校におけるエスニック授業：ドイツ系ハンガリー人の事例
Author(s)	加賀美, 雅弘
Citation	東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学, 55: 55-62
Issue Date	2004-01-30
URL	http://hdl.handle.net/2309/2795
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

ハンガリーの小学校におけるエスニック授業

——ドイツ系ハンガリー人の事例——

加賀美 雅 弘

地 理 学*

(2003年8月29日受理)

1. はじめに

エスニック集団が1つのまとまりある人間の集団として存続してゆくには、他の集団と区別される特質をもち、それを集団の構成員が自分の特質として理解し、認識する必要がある。そのために、文化と一般に称されるものが、それが神話であれ、象徴であれ、いったいに人々がそうした集団の特質を具体的に理解し、自分が帰属する集団を認知するのに最も効果的な手段として位置づけられている(スミス, 1999: 16-23)。

では、個々のエスニック集団はいかようにして固有の文化を保持しているのか。文化はエスニック集団にとっていかなる意味をもつのか。このような疑問は、著名なアンダーソンの指摘(1997)をあげるまでもなく、近年、さまざまな分野において活発な議論の対象になっている。また、固有の文化を継承するシステムについても、こと地理学に限ってみても、関心は高まるばかりである¹⁾。

筆者は、これまでヨーロッパにおけるエスニック集団の動向を知るために、ハンガリーにおけるドイツ系ハンガリー人(Hungarian German)社会を対象にして、それが1989年の政治改革以降、いかなる変化を遂げつつあるのかを観察してきた。そして、彼らの政治、社会、経済に及ぶ活動において彼らに固有の文化というものが、言語であれ、音楽であれ、著しく強調されてきた事実を指摘した(加賀美, 1997)。これらの文化は、基本的には集団が幾世代にもわたって継承してきたものであり、したがって人々自身が自分たちの文化として認識しているものである。

しかし、彼らと文化との関係を見ると、そうした文化がいわゆる伝統文化として半ば自動的に(あるいは、当然のごとく)継承されてきたものではなく、ドイツ系ハンガリー人に固有の文化というものがかなり意図的に扱われ、しかも言語や音楽、民族衣装など特定の文化が強調される傾向にあるのではないかと考えるようになった(加賀美, 2003a)。1990年代のドイツ系ハンガリー人の間で、音楽などの伝統文化が率先して強調されてきた事実を観察するにつけ、ここでいう文化がいわゆる文化全般を意味するのではなく、特定の事象に限定されたものだったからである。

そこで、ドイツ系ハンガリー人が1つのエスニック集団として存立してゆく上で、文化がきわめて重要な役割を果たすこと、彼ら自身が文化を強く意識し、文化を強調していることを示しているのではないかと推測することになった。そして、これはドイツ系ハンガリー人に限らず、少なくともヨーロッパ各地のエスニック集団が、国家を創設した、しないの区別なく、共通にもつ特徴なのではないかと考えるようになった(加賀美, 2003b)。

たとえばドイツ系ハンガリー人社会の中で民族固有の文化を意図的に強調し、世代間で継承するための装置は、随所に存在している。学校教育は、そうした装置の中でもきわめて重要な役割を果たしている。ドイツ系ハンガリー人の子どもたちに彼らに固有の文化を教授することが、そうした文化の継承に直接的にかかわってくるからである。エスニック・マイノリティを対象にした授業、いわゆるエスニック授業は、そうした文化の継承を意図した活動の重要な軸としてあげられる。

* 東京学芸大学(184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

ハンガリーでは、1993年にエスニック・マイノリティの人権確保と保護に関する法律が制定されて以来、小学校および中・高等学校におけるエスニック授業の重要性が強調されるようになった。各学校において、エスニック授業開設の要望が生徒の親から出た場合には、授業の編成を検討することが義務づけられることになった。当初、このエスニック授業とは、とくにエスニック・マイノリティの言語（以下、エスニック言語とする）についての授業をさしていた。そして、それをどれだけの頻度で実施するかが議論された結果、たとえば小学校では、エスニック言語を外国語の授業として最低限週に5コマ行うことが指定された。

しかし、エスニック言語の授業だけでは、エスニック授業に必要な内容が十分に盛り込まれないという不満がだいにみられるようになった。それは、エスニック授業が単なる言語を習得することを目的としたものではなく、子どもたちがエスニック集団の一員でありつづけることを目標にしたものであったからである。それは、とりもなおさず、これらの授業を受けることによって子供たちが当該のエスニック集団に帰属しているという意識、いわゆるエスニック・アイデンティティを確保し、強化することを最終的な課題にしていたからである。

にもかかわらず、エスニック・マイノリティ政策として決定されたエスニック授業は、言語の授業にすぎないものとなり、名ばかりのエスニック授業として批判の対象になってきた。後に述べるように、たとえばドイツ系ハンガリー人にとって、小学校で学習するドイツ語は、自身の母語である方言とは異なる標準ドイツ語、すなわち外国語であった。こうした授業では、子どもたちにドイツ系ハンガリー人としての意識を維持させるのが容易でないことは自明であろう。エスニック授業を、言語に限らず広くエスニック集団に関する知識を得る場として位置づけんとする主張が、エスニック・マイノリティ側から政府に繰り返しなされたのは、当然のことであった。

そうした運動の結果、1998年9月には、エスニック集団に固有の文化を扱うエスニック授業を実施する規定が新たに打ち出された。これによって、子どもたちはエスニック集団に固有の文化を習得し、エスニック集団への帰属意識を強める機会を得ることになった。しかし、その一方で、教育を受ける側と提供する側には、法的に決定した事項を実践するだけの十分な条件が整っておらず、それゆえにエスニック授業が必ずしも計画通りには実施されていないという問題も表面化してきた。

この小論では、こうしたハンガリーの小学校におけるエスニック授業の現状をふまえて、エスニック授業の課題についての考察を試みる。とくにドイツ系住民を対象にした授業を事例にして、いくつかの問題点の整理を行う。

2. ドイツ語によるエスニック授業

2.1 授業の形態

まず、ハンガリーにおいて、エスニック授業はどの程度実施されているのか。残念ながら、エスニック授業に関する統計は集計されておらず、実施している小学校の数すら容易に把握することができない。やや古い資料だが、ドイツ系ハンガリー人の自治組織であるドイツ系ハンガリー人自治協会 (Selbstverwaltung der Ungarndeutschen) による調査結果を引き合いに出すと、1996年9月から始まる学年暦において、何らかの形でドイツ語を教授するというエスニック授業を実施した小学校は、253校にのぼっていた。それらの小学校のほとんどがハンガリー南部のバランヤ県およびトルナ県に集中して分布するのは、ドイツ系住民の多くがこの2県に集中して居住しているからである。この地域は、18世紀後半以降、ドイツからの農業移民によって開墾された農業地帯であり、長くドイツ系ハンガリー人の土地とみなされてきたところである (Senz, 1994)。

ところで、エスニック授業は、必ずしも画一的にその内容が定められたものではなく、実際にはかなり多様な形で行われている。現在、ハンガリー政府によって認可されているエスニック授業は、実際にはおおよそ以下3つのいずれかの形態で実施されている。

①母語を用いた授業：ハンガリー語、ハンガリー文学以外のすべての科目をエスニック言語で行う形態。エスニック・マイノリティにとっては、固有の文化を容易に授業に生かせる形態である。ドイツ系ハンガリー人については、1991年にハンガリー南部の都市ベーチに創設された教育センター付設の小学校においてのみ、1998年以降、この形態の授業が行われている。

②いわゆる2言語授業：いろいろなやり方が可能だが、少なくとも3科目はエスニック言語だけで行うかたちや、より多くの科目をハンガリー語もまじえながらエスニック言語を用いて行うかたちが可能である。なお、いずれの場合にも、エスニック言語で行う授業数が週全体の授業数の半分以上になることが求められる。ドイツ系ハンガリー人を対象にしたこの種のエスニック授業は、彼らが多く居住する市町村に立地する

小学校で実施される傾向がある。後に事例としてあげられるパロタボジョク村の小学校のエスニック授業も、このタイプに属する。

③エスニック言語の授業： エスニック言語を外国語として学習するもので、エスニック授業の理念には必ずしも一致しない形態。基本的には、授業への要望に応じて、a) 拡張されたエスニック授業、すなわち少なくとも3科目の授業をエスニック言語で行うもので、これらの授業が1週間あたり全授業数の35%を越すレベルのものと、b) 伝統的なエスニック授業、すなわち週あたり少なくとも5時間のエスニック言語の授業を行うものに分けられる。すでに述べたように、エスニック授業としては、原初的な形態であるが、実際にはこのタイプの授業が最も多くなされている。1998年9月に始まる学年暦にドイツ系ハンガリー人自治協会が小学校196校を対象にして実施したアンケート調査によれば²⁾、全小学校の72%がこの種の伝統的な言語授業の形態をとっている。

もっとも、エスニック授業がハンガリーのすべてのエスニック・マイノリティにおいて、同じように実施されているわけではない。ハンガリーでは、13のエスニック・マイノリティが法的に認知されている。最大規模のロマをはじめ、ルーマニア系やスロバキア系、クロアチア系などのエスニック集団は、いずれも独自のエスニック授業を展開する権利をもっている。たとえばクロアチア系が多く居住するハンガリー南部の小学校には、クロアチア語を授業科目に取り入れているところも少なくない。しかし、クロアチア文化についての授業を取り込むまでには至っていない。

ロマについては、事態はさらに深刻である。エスニック授業を実施する権利が与えられているにもかかわらず、ロマ語の授業すらほとんど行われていない。ロマの子どもたちにとっては、エスニック授業の是非を問う以前に、就学率を上げて教育を受ける機会を高めることが大きな課題になっている。それに対して、学校教育を受けることが、ロマとしての意識を高めることに必ずしもつながらないとの危惧がロマの人々の間には存在する。このことがロマの人々にとって学校教育を受けることへの反発にもつながっている。このあたりのロマにかかわる問題については、別に稿をあらためて論じなければならない。

これに対してドイツ系ハンガリー人の場合には、全般的には、ドイツ語の社会経済的な地位が高い上に、音楽や芸能などドイツ系ハンガリー人の文化への関心も比較的高くなっている。それゆえに、ドイツ系ハンガリー人向けのエスニック授業も、他のエスニック集

団に比べると、かなり充実している。もちろん、これはあくまで他のエスニック集団と比較した上でのことであり、実際には、ドイツ系ハンガリー人向けのエスニック授業の内容にはかなりのばらつきがある。しかし、おしなべてドイツ系の人々にとってのエスニック授業が比較的充実している背景には、彼らの文化に対するハンガリー国内での一般の関心が高いことも無視できないことを、ここでは指摘しておきたい。

2. 2 エスニック授業の動向

小学校で実施されているドイツ系ハンガリー人の子どもたちを対象にしたエスニック授業は、1998年に新たに導入された指導要綱によって、幅広い事象にわたる授業を展開させる契機となった。しかし、その一方で、実際にはこうして規定された新しいエスニック授業の実施を阻む事情があり、エスニック授業が完全には実施されていないことも指摘せねばならない。結果として、エスニック授業はきわめて多様な形態をとっているのである。

では、どのような条件がエスニック授業の形態を規定しているのであろうか。ここでは、②と③のタイプのエスニック授業が、小学校が立地する集落の特徴によって区別されること、つまり住民の多くが圧倒的にドイツ系ハンガリー人である集落では、②のタイプの授業がなされる傾向にあるのに対して、③のタイプの実施されている小学校の多くが、ドイツ系ハンガリー人がもはや多数派ではない集落で行われる傾向に注目しよう。以下、エスニック授業の具体的な実施状況をあげてみる。

まず、③のタイプ。エスニック授業の目標をあらためて提示すると、学校内での日常および特定の授業でのきちんとしたエスニック言語の使用と、エスニック集団への帰属意識の強化の2点に集約される。そこで、言語の授業とは別に、いかなる授業をエスニック言語によって行うかが、エスニック授業のあり方を決める鍵になる。

ドイツ系ハンガリー人の場合に、エスニック言語はドイツ語である。しかし、ここでいうドイツ語は、ドイツ系ハンガリー人の母語ではない。なぜなら、彼らにとっての母語は、200年以上前にこの地域に入植した南ドイツ出身の農業移民にさかのぼる南西ドイツ方言だからである。それゆえに、授業で教えるドイツ語が彼らの母語である南西ドイツ方言ではなく標準ドイツ語であり、彼らにとってこのドイツ語は、一般のハンガリー人と同様に外国語にすぎなかった。

ドイツ語は、ハンガリーにおいては、ある程度の経

済的価値をとまなう言語である。ドイツの企業とのビジネス、ドイツ人観光客との対応などドイツ語は経済的な優位と関連した言語である。この点では、他のエスニック・マイノリティに比べると、ドイツ系ハンガリー人は恵まれていた。しかし、ドイツ語を習得して広くビジネスを手がけようとする子ども（あるいはそれを期待する親）の多くは都市に多く居住していた。これに対して農村では、ドイツ系住民が全住民の絶対多数を占めるのでなければ、むしろハンガリー語を習得することへの関心の方が強かった。第二次世界大戦後に実施されたドイツ系住民の国外追放によって、かつての彼らの専住地域には多くのハンガリー人が流入し、現在ではドイツ系ハンガリー人が専住する農村も数少なくない。ハンガリー人とともに農村部に居住するドイツ系ハンガリー人の多くは、標準ドイツ語をあらためて学習することにそれほど強い関心を寄せていないのが実情なのである。

つまり、ドイツ系住民が多く住む農村においても、かなり広くみられるハンガリー人との混住という状況の中で少数派になっているところでは、そうしたドイツ系住民を対象にしたエスニック授業への関心はそれほど高くはないといえる。

これに対して、ドイツ系住民が多数を占める農村では、状況は異なっている。そこでは、ドイツ語の授業だけでなく、その他の教科をもドイツ語で行うような②のタイプのエスニック授業が行われる傾向がみられる。住民のドイツ文化に対する関心が、教育への要望というかたちであらわれている。

エスニック授業の一環としてのドイツ語を用いた授業科目として最も多いのは、ドイツ系ハンガリー人協会が小学校を対象にして実施した調査結果によると、圧倒的に地理と歴史である。地理は、とくにドイツ系ハンガリー人が集中して居住する南部のバランヤ県やトルナ県に関する自然、歴史、経済、文化などの地誌学習が中心になっている。このほか、ドイツやオーストリアなど隣接するドイツ語圏の諸地域についての学習も行っている。歴史においては、ハンガリーの歴史を学習する過程で、とくにドイツ系ハンガリー人の入植の歴史と、第二次世界大戦前後のドイツ系住民の生活や国外追放について学ぶようになっている。いずれも専用の副読本や教材が開発されており、民族固有の歴史や文化を理解するために不可欠な科目として位置づけられている。

このほか、小学校によっては音楽の授業をドイツ語で実施する小学校もある。ドイツ系ハンガリー人固有の民謡やドイツ民謡などハンガリー人とは異なる文化

を学習する場として、音楽もエスニック授業として実施しやすい科目になっている。

にもかかわらず、いずれの科目においても、エスニック授業の一環として実施されている授業において、ドイツ語は部分的にしか用いられていないという現実がある。ドイツ系ハンガリー人協会による資料によれば、各科目について、ドイツ語とハンガリー語の使用状況をみると、ドイツ語のみで行われている授業はきわめて少ない。ドイツ語のみでなされる授業が最も多い科目は地理で、約1/3の小学校が実施している。歴史の場合は約20%、音楽はわずか6%の学校において、ドイツ語だけを用いた授業が行われているにすぎない。

このようなエスニック授業のあり方には、さらに深刻な問題が潜んでいる。それは、ドイツ語を用いた授業を行う教員のうち、およそ1/3は、自分の専門外の科目を担当していることである。たとえば、地理あるいは歴史の授業をドイツ語の教員が行っているケースが少なくない。これは、ドイツ語を用いてこれらの科目の授業を行える教員の絶対数が少ないからである。

実際、ドイツ語で実施される授業には、図画や体育などの科目があてられる傾向があるが、それらはいずれもドイツ語そのものを用いる機会が少ない科目だからだという。

また、ハンガリー社会においてドイツ語の授業を受けることが、子どもたちに負担になっていることも否定できない。進学率が上昇し、大学入学試験が年々厳しさを増す中で、ドイツ語を用いた授業は、一部のエリート校を除けば、子どもたちには過重負担になっているという。それが証拠に、生物や情報、数学など専門知識を要し、大学受験の際に重要な科目については、エスニック授業が実施されにくい傾向がみられる。

また、エスニック・マイノリティ集団において求められるエスニック授業を実施するには、それを担当できる資質をもつ教員が必要である。ドイツ系ハンガリー人協会の調査によると、ドイツ語によるエスニック授業を実施している小学校の約2/3は、教員数が15人以上の中・大規模の学校である。これに対して、各小学校においてエスニック授業を担当する教員数をみると、全体の42%の小学校ではエスニック授業を担当する教員が3人以下であり、8人以上を要する小学校は全体のわずか14%しかない。小規模な小学校では、エスニック授業を担当する教員数が少ない傾向があり、このことがエスニック授業の時間数を増やすのをむずかしくしている。

新しく導入された指導要領では、このような授業を担当する教員に一定の試験が課せられている。しかし

実際には、ドイツ語と特定科目とともに専門にする教員を養成するコースが大学になく、ゆえに指導要領の導入が、エスニック授業の実施の可能性を逆に小さくしかねないという皮肉な状況が予想されている。そうした中で、専門科目を独学で理解したりドイツに研修に出たりするなど、個人レベルの努力によってエスニック授業はある程度維持されているのが現実である。

3. パロタボジョク村の小学校におけるエスニック授業

では、ドイツ系ハンガリー人にとってのエスニック授業はどのような展望が予想されるのであろうか。ドイツ系住民が多数を占める農村であるパロタボジョク Palotaboszok（ドイツ名ボショク Boschok）村において、積極的にエスニック授業に取り組んでいる小学校を事例にして、エスニック授業の意義について考えてみよう。

ハンガリー南部の都市ペーチの東、約30kmに位置するパロタボジョク村は、18世紀後半に南西ドイツ出身の農業移民によって発展してきた。この村に1校ある小学校³⁾の生徒全員がこの村に在住しており、2000年9月における生徒数は85名（1年生：6名、2年生：9名、3年生：12名、4年生：7名、5年生：10名、6年生：13名、7年生：8名、8年生：20名）で、各学年とも1クラス構成である。教員は13名おり、11名がドイツ系ハンガリー人であるほかに、南西ドイツ出身のドイツ人が2名いる。これは、南西ドイツのバーデン・ヴェルテンベルク州から派遣された教員である。ドイツ系ハンガリー人のもともとの出身地である南西ドイツの諸地域と、ここ10年ほどの間に積極的な関係が生まれている⁴⁾。

生徒の多くは、ドイツ系ハンガリー人の家庭の子どもである。教員の談によれば、家庭では、南西ドイツ方言を使うことがあるものの、日常語はハンガリー語なのだという。とくに学校では、エスニック授業でドイツ語が用いられることがあっても、日常はハンガリー語のみで生活している。しかも子どもたちは、家庭で用いる方言の能力は十分あっても、ドイツ語は必ずしも理解できるわけではないという。すなわち学校で教わるドイツ語は、いわゆる母語とは別の外国語なのである。

一方、この小学校では、父母たちの強い要望から、エスニック授業が実施されてきた。1998年に新しい指導要綱が導入される以前には、ほかの小学校と同様に、この小学校においてもいわゆる2言語授業が行われて

いた。つまりドイツ語（週5時間）のほかに、地理と歴史（各1時間）が2つの言語で行われていた。とはいえ、実際にはいずれの教科の授業もほとんどがハンガリー語で行われ、ドイツ語は内容を要約する際に用いられる程度だった。

新しい指導要綱によって、授業形態は大きく変わった。基本的なドイツ語学習の徹底化が進められた一方で、エスニック文化や身近な地域、そしてドイツ語圏地域についての学習が可能な限りできる状況が作りだされた。たとえばドイツ語の授業にはエスニック集団のさまざまな特徴を学ぶエスニック学習が盛り込まれた。各学年の授業内容をあげてみよう。

《第1学年》「民衆文学とエスニック文化」

短い格言や詩句を学ぶ、童話を読む、童謡を歌う、自宅にある古いものを集めて村の昔を考える森や畑にすむ動物について学ぶ

《第2学年》「民衆文学とエスニック文化」

地元のことわざや詩を学ぶ、地元の昔話を読む、村に伝わる子供の遊びをやる、キリストの祭りを学ぶ

《第3学年》「民族文化およびエスニック文学」

地元のことわざを学ぶ、地元の天気俚諺を学ぶ、歴史と童話を学ぶ、ドイツ文学作品を学ぶ、村の子供の遊びや歌を知る、村に伝わる古いおもちゃを製作する、村の特徴的な方言を学ぶ、祖父母から村の昔と今を学ぶ

《第4学年》「エスニック文化」

村の職業の昔と今を知る、村の古い手工芸品を学ぶ、村で知られる童話や話、ことわざや歌を知る、古くからの村の子供の遊びを知る、村の民族舞踊を知る

《第5学年》「エスニック文化」

古いおもちゃを製作する、昔のキリストの祭りを知る、祖父母がもっている古い写真から民族衣装を学ぶ、古い料理方法を学ぶ、村の歴史や伝統芸能を学ぶ、古くからの村の子供の遊びや民族舞踊を知る、昔の学校の様子を老人から聞く

《第6学年》「エスニック文化」

村の学校の歴史を学ぶ、古い教科書を収集して展示する、料理から南ドイツ・シュヴァーベン地方の伝統文化を知る、村の古い農家を訪問する、古い農事暦を知る、村の農家における言い伝えを収集する、村の年中行事を知る

《第7学年》「エスニック文化」

ドイツ系ハンガリー人の民族舞踊や民族衣装を知る、村の合唱団やバンドに参加してドイツ系

ハンガリー人の音楽を学ぶ、ドイツ系ハンガリー人の伝統的な工芸品を知る、工芸職人の工房を訪問して工芸品の展示をみる、古い農家の見取り図を読む、祭日の料理を学ぶ

《第8学年》「エスニック文化」

ドイツ系ハンガリー人の伝統衣装（普段着と礼服）を学ぶ、村の方言を収集する、村で使われる標準語と方言の関係を考える、ドイツ系ハンガリー人家庭の歴史を知る、村の歴史や昔からの言い伝えを知る、村で行われる冬の仕事（刺繍、糸紡ぎ、かご作り、箒作り）を知る、村にある新旧の耕地名を知る、村にある十字架像やキリスト像の歴史を知る

これらを見ると、1学年から村の文化を歴史的に学び、その特徴を考える授業が計画されている。ドイツ語方言あるいは標準ドイツ語で書かれたものを読み、あるいは老人から方言で語られる話を聞き、記録する。あるいは、料理や工芸品を自分で製作することによって技術と知識を身につける。音楽や踊りを演奏し、自ら体験する。そして、何よりもこれによって自分が住む村において、あるいは家族によって古くから受け継がれてきた文化を知り、それを自分のものとしても共有する意識が芽生えてくることが期待されている。

さらに、6年生までは村のことを学ぶというテーマだったが、7年生からはドイツ系ハンガリー人を学ぶことに重点が移っている。つまりエスニック授業を受けながら、しだいにエスニック集団の一員としての意識を強めてゆくような段取りになっている。

このほか、エスニック授業に準じた課外授業も積極的に行われている。なかでも放課後や週末を利用して近隣の郷土博物館を訪問する企画は、小学校における重要な行事にもなっている。郷土博物館には、その地域の自然環境をはじめ、歴史や経済、文化などが展示されており、手っとり早くその地域を知ることができる便利な施設である。しかし、それは同時に地域の内外にその地域と人々を地域の内外に知らしめる場としても設定されており、多くの場合、地域意識や住民意識を強める装置として、きわめて意図的に展示品が選択され、配置されている。小学校の課外授業では、博物館は明らかにエスニック授業の内容を補強する場になっている。

以上のようなエスニック授業は、おおむね計画通りに実施されている。ドイツ系ハンガリー人が多く居住し、それゆえに古くからの伝統文化が多く残存しているこの村では、このような授業が可能なのだと思われる。

その一方で、すでにみたように、ドイツ系少数集団

が少数派になっている地域では、エスニック授業への関心はさほど高くない。しかも、ドイツ系の伝統文化を保持してきた世代がしだいに減少していること、その子供の世代には伝統文化はもはや家庭内では継承されにくくなっていることを背景にして、エスニック集団に固有の伝統文化は、従来のような身近で日常的なものから、新たに学び取る対象へと変化している。

こうしたなかで、学校教育がエスニック文化の継承に果たす役割はいかようなのであろうか。

エスニック授業がハンガリー国内で必ずしも一様に行われていないこと、ドイツ系住民が多く居住する集落においてこうした授業が活発化していること、その反面、ドイツ語の読み書き能力をもつことはさまざまなビジネスチャンスともつながりうることをふまえると、ドイツ系住民とエスニック文化とのかかわりは、集団全体で起こるといっても、ある限られた人々の間で急速に進んでいるように思われる。それは、エスニック教育を受け、ドイツ語能力を獲得した人々であり、ドイツ方面をはじめとするさまざまなネットワークを獲得し、ビジネスチャンスにめぐり合う可能性の高い人々において顕著にあらわれるのではなかろうか。エスニック文化が意図的に継承されるものであるとするならば、まさしくエスニック授業を受けた人々がエスニック文化継承の担い手になってゆくのではなかろうか。

この点で考えておきたいのは、意図的かつ恣意的になされるエスニック文化の継承にあり方についてである。かつては伝統文化の継承者というのは、局地的に根を張り、空間的に限られた居住地域において親から子へと昔変わらぬ慣習やしきたりの一切合財を伝えるものと考えられた。しかし、実際には文化の継承は、おしなべて誰の手によっても同じようには行われていない。少なくとも、ドイツ系ハンガリー人の間に近年あらわれた伝統文化への強い関心をみると、それが特定の人々の間で起こり、特定の人々の手で次の世代へと継承されていくように思われる。文化継承のメカニズムは、さしずめ教育を受けた高学歴者、より高い社会的地位を獲得した人々の手にゆだねられるのではなかろうか。このあたり、今後検証されるべき点としてあげておきたい。

いずれにせよ、エスニック授業を受けた子どもたちが、エスニック集団に対して今後どのような活動を行うようになるのか。ドイツ系ハンガリー人の今後の動向を占う重要な鍵として、彼らの文化の継承がどのようになされてゆくのかを、継続して観察してゆく必要があるだろう。

4. おわりに

ハンガリーでは、1989年の政治改革後、国内に居住するエスニック・マイノリティの人権と保護に重点をおいた政策を展開している。小学校や中学校および高等学校において実施されているエスニック・マイノリティのための特別授業、いわゆるエスニック授業も、そうした政策の重要な柱になっている。とくに1998年に導入された新しい指導要綱によって、エスニック授業は、これまでのいわゆる2言語授業中心の形態から、より地域的、民族的な特性を考慮した新しい授業形態への移行が進められている。しかし、実際には、さまざまな問題があつて、エスニック授業は必ずしも政策どおりに実施されてはいない。ここで、小学校で実施されているエスニック授業とその問題についてまとめておこう。

1) ドイツ系ハンガリー人が多く居住する市町村に立地する小学校では、エスニック授業はドイツ語だけでなく、ドイツ系ハンガリー人の日常生活や伝統文化など幅広く学習する場になっている。これに対して、ドイツ系ハンガリー人が少ない市町村では、エスニック授業はおおかたドイツ語の学習だけに終始している。

2) ドイツ系ハンガリー人が少ない市町村では、ドイツ語やドイツ文化の学習が、ハンガリー社会での教育を受ける上で負担になると感じる親が多い。ドイツ語による授業を受けることが、子供の学校教育を受ける点で不利に作用すると考える者も少なくない。ハンガリー語で知るべき専門知識をドイツ語で教わるために、中学校や大学入試に不利になると考えて、ドイツ語による授業から遠ざかろうとする傾向もみられる。

3) エスニック授業が厳しい法的基準に縛られていることも、エスニック授業に積極的になりにくい条件になっている。たとえばエスニック授業の一環としていくらかの科目をドイツ語で行う場合、以前はハンガリー語とドイツ語を用いた授業という形態だったために、ドイツ語がいくらかできる教員がいれば実施できた。しかし、新しい指導要綱による新しいエスニック授業では、ドイツ語が十分にできる教員を養成する機関が整備せねばならないほか、専用の教科書を作成し、学校単位でカリキュラムを新たに構築し、審査を受けなければならない。

4) そうした新しい授業の構築には、もちろん十分な財源が確保されねばならない。しかし、全般的にはエスニック授業に対する補助金は少なく、とくに小規模学校では、運営費の占める割合が高いために、多彩

な需要に対応しきれない。あるいは、学校の統廃合や通学バスの整備などが解決への糸口になるかもしれない。

もちろん、こうしたエスニック授業において子どもたちが学ぶ文化とは、教員をはじめ行政や地域団体などさまざまな意思決定者たちによって強調されたものである。それが、エスニック集団固有の文化として将来的に継承されてゆくものかどうかは、もう少し観察してゆかねばわからない。また、おしなべてエスニック集団に固有の文化といわれるものが、はたしてこうした意図的に強調されるものに限るのかも、あわせて考える必要があるだろう。

本稿を作成するにあたり、平成15年度文部科学省科学研究費補助金「移民の適応戦略と前適応からみた移民社会・ホスト社会の地域生態学的比較研究（研究代表者：矢ヶ崎典隆）」の一部を使用しました。

注

- 1) たとえば椿(1999)は、カナダの日系社会における文化の世代間での継承に際して、さまざまな行事が果たす役割について考察している。
- 2) ドイツ系ハンガリー人協会によるエスニック授業に関する調査報告書を利用した。
- 3) 2001年2月における学校長からのききとりによる。
- 4) この村は、南西ドイツの町 *Dettingen* と姉妹都市を結んで積極的な交流活動を行っている。

文 献

- アンダーソン, B. 著, 白石さや・白石 隆訳 1997. 『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT出版.
- 加賀美雅弘 1997. ハンガリーにおけるドイツ系少数集団と地域変化. 東京学芸大学紀要第3部門48: 229-244.
- 加賀美雅弘 2003a. 旧東ヨーロッパにおける地域文化形成に果たすエスニック・マイノリティの役割—ハンガリーのドイツ系集団を事例として. 東京学芸大学紀要第3部門54: 63-74.
- 加賀美雅弘 2003b. ヨーロッパにおけるエスニック集団の文化に着いての覚書き. 学芸地理58: 11-22.
- スミス, A.D. 著, 巢山靖司・高城和義訳 1999. 『ネーションとエスニシティ—歴史社会学的考察』名古屋大学出版会.
- 椿 真智子 1998. 多文化社会カナダにおける日系人社会の変容と文化継承—Ethnic文化は存続するか. 東京学芸大学紀要第3部門49: 141-156.
- Senz, I. 1994. *Die Donau-Schwaben (Studienbuchreihe der Stiftung Ostdeutscher Kulturrat Band 5)*. München: Langen Müller.

Ethnic school classes in Hungary A case of the Hungarian German minority group

Masahiro KAGAMI

*Department of Geography**

(Received for Publication ; August 29, 2003)

Ethnic culture, according to Benedict Anderson, is an important instrument to build and develop ethnic groups in the modern era, as stated in his *“Imagined communities : Reflections on the origin and spread of nationalism”* (1991). Each ethnic group has its own distinct culture, identification with which identifies an individual as a member of a particular group.

In the case of the Hungarian German minority group in Hungary, especially after the political reform in 1989, German ethnic culture has been appealed to very consciously and the existence of the group has been notably confirmed within the Hungarian society. Here, in particular, cultural awareness is an important factor for group development.

In this context it is paramount for ethnic group identity that cultural elements are passed on from generation to generation. For this purpose, ethnic elementary school classes in Hungary have been established and coordinated. These classes for the German ethnic group have been highly supported and have significantly developed, especially through the recent outline on ethnic classes announced in 1998 and fostered ever since.

In the meantime, pupils having attended these German ethnic classes seem to have assimilated some elements of German culture. It is especially interesting that not only Hungarian Germans but also Hungarians attend these German ethnic classes. It is probable that within these German ethnic classes the teaching of German culture will become modified from a strictly ethnic approach to include more local elements in the near future.

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)